

# 焦土篇

## 映画文学人生論

- 031) 黒い雨 井伏鱒二 参考：今村昌平監督の映画  
032) 肉体の門 田村泰次郎 参考：鈴木清順監督の映画  
033) 人間失格 太宰治 参考：荒戸源次郎監督の映画  
034) 青い山脈 石坂洋次郎 参考：今井正監督の映画  
035) 二十四の瞳 壺井栄 参考：木下恵介監督の映画

### 国破れて映画文学あり

終戦直後の混乱期の思い出にふけりながら当時の世相を伝える文学作品五篇を選んでみた。

黒い雨	井伏鱒二	今村昌平
肉体の門	田村泰次郎	鈴木清順
人間失格	太宰治	荒戸源次郎
青い山脈	石坂洋次郎	今井正
二十四の瞳	壺井栄	木下恵介

原爆の後遺症に苦しむ被災者、焼け跡闇市で生きる復員兵と娼婦（パンパン）、玉川上水で情死した作家、民主主義の時代をむかえて青春賛歌をうたう若者、戦争の時代を生きぬいた分教場の女教師とその教え子。

いずれも昭和二十年代前半の世相を伝える作品で、『肉体の門』と『青い山脈』は昭和二十二年作、『人間失格』は昭和二十三年作だが、『二十四の瞳』は少し遅れて昭和二十七年、『黒い雨』は昭和四十年に発表されている。

五篇を比較してみると、原作よりも映画のほうが知名度が高いという印象を受ける。もちろん、映画化による相乗効果という要素もあるが、戦争をはさんで、一般大衆に与える影響力という点においては、文学が映画に対して劣勢になったのではないかという気がする。

『肉体の門』『青い山脈』『二十四の瞳』は映



## 焦土篇

映画文学人生論

画を通じて知っているだけという観客が多く、原作を読んでいる人はごく少数だろう

『黒い雨』と『人間失格』はちがう。作者が独特の個性的な文体を持っているからだ。文体にひかれていた愛読者は映画では満足しない。

『人間失格』はなんども映画化されているが、私は観るたびに、原作に遠く及ばないと感じた。文学が映画に負けていない例だと思う。

『黒い雨』は読みにくかった。井伏鱒二の文章は『山椒魚』でなじんでいたが、『黒い雨』を読みほどくのは容易なことではない。私は三度、読みかけて、途中で投げ出し、今村昌平監督の映画を観た後でやっと最後まで読むことができた。

おそらく映画の助けを借りなければ、読了できなかったのではないか。今村昌平の文体は井伏鱒二の文体よりもわかりやすい。

いずれにせよ、昭和二十年代は飢餓の時代だ。日本人は食糧にも饑えていたが、文学や映画にも饑えていた。そんな時代に育った私も文学や映画への饑えを知っている。理由も何もわかっていないのに、何となく食糧に対する饑えよりも高級な饑えだと思っていた。

敗戦によって日本全土は焦土と化す。焦土で生きぬこうとする庶民にとって、昭和二十年代は、ハングリーな時代だった。

国破れ闇市賑わう秋の暮